税からの恩恵

金沢大学人間社会学域学校教育学類附属中学校３年　　荒木　結夢

私の父は、日々、救急救命士として、救急車に乗っている。小学校のとき、学校に講師の方がいらっしゃって、税についての勉強をしたことがある。そのときの今でもとても記憶に残っているものがある。それは、講師の方が見せてくださった「もし、税金がなくなったら」というアニメだ。その中に、お金が払えないからと、けがをしている人がまわりに救急車を呼ばないでと必死に訴えているシーンがあった。呼んでほしいとお願いすることはあっても、呼ばないでと言うなんて、ととても驚いた。帰宅後、父にこのことを話すと、もし、税金がなかったら、消防署は会社になって、利益を求めることになるという話をしてくれた。

今年の七月。参議院選挙が行われた。ニュースで毎日のように、各党の減税についての方針が報道されていた。多くの人が、テレビ局のインタビューで減税に賛成だと答えていた。しかし、あるときのインタビューで強く反対すると答えている人がいた。その人は、減税することで、足りなくなった税収分を国債など他のもので補うのは良くないと述べていた。これを聞いて、減税が良いというのは、国民の消費という視点からだったことに気づいた。もし、税収が足りなくなれば、父の仕事をはじめとした様々なことがまわらなくなる。税についての考えが改められた機会だった。

父が、仕事の話をしてくれるときによく言う言葉がある。

「住民サービスの向上を一番に」

だ。自分の給料や救急車、消防車の運用は、住民が払っている税金でまかなわれている。だから、住民サービスを一番に行動しなければならないとよく言っている。このような話を聞くまでは、正直、私は税に対して、マイナスのイメージを持っていた。それは、税金の用途をあまり分かっていなかったからだ。

税金があることによって、国、県、市町村からの公共サービス、消防や警察の運用ができている。特に、近年、懸念されている災害への対策や復旧にも必要不可欠である。実際に、令和六年能登半島地震では、石川県などに特別交付税として四十九億円余りが交付されたそうだ。このような、いざというときに必要な資金も税金でまかなわれている。

私たち、中学生などの未成年者にとっての身近な税といえば、消費税くらいだ。しかし、教科書や学校の設備、その他の公共サービスなど、すでに多くの税金の恩恵を受けている。そのため、改めて税金とは何か、何に使われているかを知り、将来、自分も国民として、納税という義務を果たすべきだと考える。